

「序」

研究室の活動報告もこれで10冊目である。第1冊目の「頭地下手遺跡」が出たのが1978年であるから、毎年2乃至3冊ずつ出し続けたことになる。実習の講義を受け、その仕上げとして野外実習を企画して、交渉して、遠征して、掘って、整理して、報告書を出版するまでが「実習」であるから、ひるまずに取り組んだ者にとってはかなりの勉強になったと思う。その反面、実習の密度の高さに自足してしまい、他学や他組織の仕事に参画する姿勢が弱いように思われる。自戒されたい。

今回の調査は人骨を中心とする調査である。当研究室には人骨の調査能力がないので、はじめは笠利町の話を九大の永井昌文教授に取り次ぐだけの心算でいた。しかし教授から、人骨以外は考古学の領分ではないか、と参加の督促を受け、甲元助教授からは、研究室中が人骨の講義を実地に聞けるまたとない機会ではないか、とアジテートされた。そうこうするうち、前号の「序」に述べたような遺憾ないきさつで沖永良部島の石原遺跡の話がつぶれ、与論と笠利を一度にやることになったわけである。

私は両方を飛び歩かねばならなかったので、遺跡の発掘は甲元助教授が終始指揮をとった。人骨の処置一切については永井教授が自ら指図された。報文についても教授が出土人骨の所見を認めて下さり、田中良之・木下尚子氏も原稿をお寄せ下さった。

一方発掘状況・遺物・遺跡などについては実習のシステムに従って当研究室の学生が報告を担当した。それぞれ何度も書き直した苦心の作であるらしいが、並べてみるとことさらに見るかげもない文章である。たまりかねてしきりに手を加えたがどうにもならない。同じ紙面に名前を並べさせていただく無礼さについて、北に向って頓首をくりかえしている次第である。

なお、貝種の同定については薬学部浜田善利氏、ウニの同定については奈良崎和典氏の御教示をいただいた。笠利町教育長大野清延氏、公民館長中場徳義氏、宇宿区長昇睦朗氏をはじめ行政の方々から力強い御支援をいただいた。また、付近住民の皆様から、激励のお言葉のみか、沢山な差し入れものまでいただいた。感謝の他にない。

昭和56年 3月20日

白木原和美



奄美大島笠利町西側海岸部分航空写真（国土地理院撮影）

発掘調査参加者

考古班

白木原和美 甲元真之
本田京子 西住欣一郎
小畑弘己 谷口武範
辻 満久 永目尚子
古荘千栄子 村岡則継

人類班

永井昌文 中橋孝博
田中良之 木下尚子
奄美考古学会
中山清美 牧野哲郎
里山勇広

整理・研究・報告書作成

資料は次のように分担して整理・研究した。

考古班 地形図・遺跡関係諸記録・土器・石器・貝類
・貝製品の一部

人類班 人骨・土壌関係諸記録・貝類以外の自然遺物
・貝製品の一部

報告書の編集；原稿を考古班に集め、考古班側で編集し、
その指揮を西住がとった。各執筆者は文末に記名して示
した。

本文目次

一 遺跡の位置と環境…………… 1	2. 石器…………… 17
二 調査の概要	3. 貝製品…………… 17
1. 調査の経過…………… 3	五 自然遺物
2. 層 序…………… 5	1. 貝…………… 21
3. 遺物の出土状況…………… 7	2. 魚骨…………… 25
三 遺 構	3. 動物遺存体…………… 26
1. 土擴墓…………… 11	六 宇宿港遺跡出土 の人骨について…………… 30
四 出土遺物	七 まとめ…………… 32
1. 土器・陶磁器…………… 12	